

埋蔵文化財 愛知



no.43



はちおうじ 八王子遺跡

八王子遺跡から弥生時代前期と弥生時代中期の環濠が見つかった。弥生時代前期の環濠は1条で、幅約3m、深さ約1.2mの規模をもつ(写真下)。弥生時代中期の環濠は2条あり、いずれも幅約5m、深さ約1.5mである。弥生時代前期と中期の環濠が同じ遺跡から見つかった例は愛知県下ではきわめて稀であり、尾張北部の拠点集落として今後の調査が注目される。

愛知県前方後円(方)墳一覧表

<尾張地域>

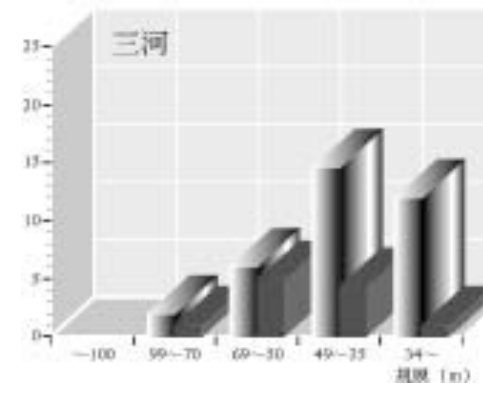
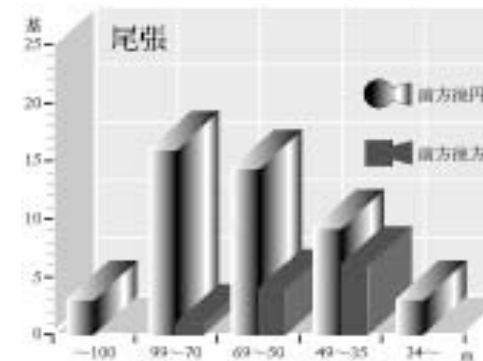
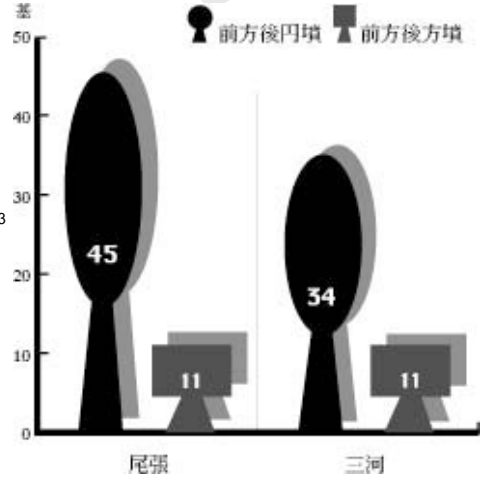
Table listing archaeological sites in the Owari region, including site names, types, dimensions, and locations.

<三河地域>

Table listing archaeological sites in the Mikawa region, including site names, types, dimensions, and locations.

愛知県ベスト16

Table of the top 16 archaeological sites in Aichi Prefecture, listing site names, dimensions, and locations.



前方後方墳・前方後円墳

愛知県内の前方後円(方)墳は101基を数え、尾張地域に56基、三河地域には45基と、平成7年の段階ではおおむね旧国単位では約50基前後という数値を確認できる。しかしその内容は大きく異なり、三河地域では墳長50m以下の小規模な前方後円(方)墳が多くを占めるのに比べて、尾張地域ではむしろ90m～50m以上に中心がある。一方で前方後方墳は三河地域では50～40mクラスが多いのに比べて、尾張地域では60～35mの中で散在的なあり方を示す。これは近年新たな視点で提唱されている前方後方墳研究での尾張地域の特異性をそのまま反映しているものと考えられる。規模のみを比較すると尾張地域の優位性は動くことはないものの、これは断夫山古墳に代表される古墳時代後期の尾張地域の特徴を表しているものと思われる。

分布についてはまず特徴的なあり方を示すのが、豊川水系および安城市の前方後方墳の集中的な分布である。現状では前者が5基、後者が4基と推定されている。次に尾張地域では名古屋台地部における大型前方後円墳の造営が注目できよう。さらに帆立貝形古墳では名古屋市志段味地区に集中して分布が認められる。古墳時代後期の大型古墳造営に伴う名古屋台地周辺部の特殊性と考えられる。

なお規模などの詳細な数値の確認については、調査事例がほとんどなく不明瞭な部分が多い。したがって現状では一つの目安であり今後の墳丘調査成果の増加を期待したい。また前方後円墳・前方後方墳を含めた形状の判断も同様に曖昧な部分もあり、おおまかな現状分析に留まっているのが現状と思われる。数基の重要な古墳の基礎データの修正も必要と思われるが、ここでは公表資料をおおむねそのまま掲載した。また造出付円墳は除外した。

掲載資料は『前方後円墳集成 中部編』山川出版社1992のデータを基本として、市町村史等の記述を使用した。



(埋文セ 赤塚次郎)

遺跡調査速報

NA335号窯跡

名古屋市緑区大高町 愛知県埋蔵文化財センター

本遺跡は、名古屋市緑区大高町高根山地内に所在し、周辺の地形は狭い谷を含む丘陵地である。調査は環状2号線建設工事の事前調査として、平成7年8～11月にかけて行った。調査面積は900m²である。

検出した主な遺構は窯跡5基で、同時に灰原も確認できた。出土遺物は灰釉系陶器（山茶碗・皿）で、いずれも12世紀後半から13世紀前半のものと思われる。各窯跡は、傾斜を持たせたこの時期の灰釉系陶器生産窯4基の他、1基のみ床面が平坦で円筒形の窯体構造を呈する。円筒形の窯を除く4基のうち、3基はこの時期の椀を敷き詰めた床面下施設を持ち、さらにこの中の1基はこの施設が上下2段に重なっていた。円筒形の窯は炭を生産した可能性もうかがえるが、その目的は不明である。



床面下施設検出状況

(埋文セ 松田 訓)

おおけ 大毛池田遺跡

一宮市大毛 愛知県埋蔵文化財センター

大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曾川町北東部に所在し、木曾川により形成された自然堤防上に位置する。本調査は、東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として、平成5年度から継続実施している。

今年度の調査の中で注目されるのは、A・B区で検出された旧河道とそれに沿うように北東から南西にかけてほぼ並行に走る4～5条の大溝（幅8～10m・深さ2m前後）である。7世紀前葉から9世紀代にかけてのもので、その規模等から見て濃尾平野の治水事業の歴史を考える上で貴重な資料となろう。また、大溝は、南接する門間沼遺跡にも認められ、大毛池田遺跡との関連の究明も課題となろう。



95A b区大溝

(埋文セ 前田雅彦)

朝日遺跡

西春日井郡清洲町 愛知県埋蔵文化財センター

弥生時代の環濠集落として著名な朝日遺跡は、東西1.1km、南北0.8kmに広がる大遺跡である。今年度は、遺跡の南西端にあたり、前期の貝塚である‘貝殻山貝塚’に南接する地点約2700m²を調査する予定である。調査は平成7年10月から行われ、現在までのところ、鎌倉時代～戦国時代の方形土坑群30基、5世紀～6世紀前半の方墳20基が検出できている。方形土坑のうち、戦国時代に属するものは、隣接する清洲城下町遺跡を含め初めて確認されたもので、室町時代以前のものに比べて大型である。また古墳は、それぞれが周溝を共有し、一定の間隔をもって造られており、造墓されない部分を挟んで、同一規模のものが並ぶ北部と格差のある南部に分かれる。遺物はきわめて少なく、周溝から須恵器甕片や土師器高杯・甕・勾玉が出土している。



古墳検出状況

(埋文セ 宮腰健司)

八王子遺跡

一宮市大和町苅安賀

愛知県埋蔵文化財センター

八王子遺跡は一宮市の東南部に所在する遺跡で、地形的には日光川左岸の自然堤防上に立地している。本遺跡の南西約1kmには弥生後期の土器様式の名称で知られる山中遺跡（弥生前・後期）をはじめとする萩原遺跡群が同じ自然堤防上に展開している。

この遺跡は従来、弥生時代の遺物散布地として知られていたが、正式な発掘調査はこれまで1度も行われてこなかった。今回は東海北陸自動車道の建設にともない平成7・8年度の2年間にわたって調査を行うこととなった。なお本年度の調査面積は8734㎡で、現在も進行中である。現在までの調査で、弥生時代前期から鎌倉・室町時代にかけての遺跡であることがわかってきた。弥生時代には、本年度の調査区ほぼ中央を北東から南西に幅100mを超える巨大な自然の谷が走っており、その北で前期の環濠が1条、総延長約70mにわたって見つかった。環濠の外では石器製作に出た石屑を捨てた土坑が2基と1辺3mの小型で四隅に陸橋部をもつ方形周溝墓を1基検出した。

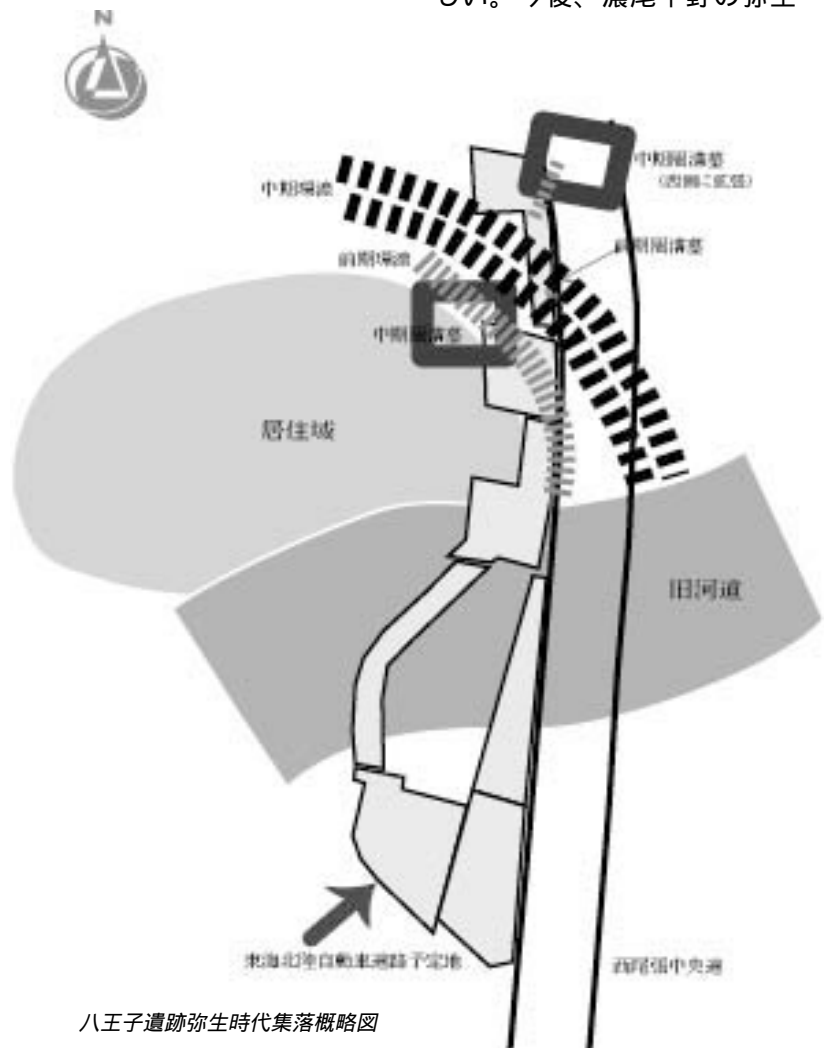
中期前半には居住域が拡大し、前期の環濠の北に2条の環濠が掘削される。内環濠からは朝日式から貝田町式にかけての土器が数多く出土している。居住域内は竪穴住居や土坑・溝などが複雑に錯綜して見つかっている。この時期の特筆すべき遺物としては玉作りに用いた可能性をもつ溝の刻まれた砥石が2点のほか、100点を超える多量の石鏃が出土している。この時期の居住域はほぼ全面に火をうけ

た痕跡があり、その上を炭化物や焼土がまじった土で整地している。その後、中期後半（高蔵期）には3基の方形周溝墓が築かれており、この時期には墓域に変わっている。3基のうち2基は同じ位置で西に拡張するように造り替えられたものである。

弥生時代後期から古墳時代前期には居住域が展開しており、竪穴住居や溝などの遺構から大量の土器が出土している。弥生時代の巨大な谷もこの時期には埋没して古墳時代前期の独立した居住域となっている。

このほか、古墳時代中・後期の溝や奈良～平安時代前期の掘立柱建物群や土壙墓群、鎌倉～室町時代の屋敷地など、弥生時代から中世までほぼすべての時代を網羅した遺構群が展開している。

弥生時代前期の環濠集落は愛知県下で6例目で、中期の環濠も同時に見つかった例はきわめて稀であることから、尾張北部における弥生時代の拠点集落のひとつにあげられよう。また、弥生時代後期以降も衰退すること無く、連綿と中世に至るまで継続していくような遺跡は愛知県内のみならず全国的に珍しい。今後、濃尾平野の弥生・



八王子遺跡弥生時代集落概略図

遺跡調査速報

こばり
小針遺跡

知立市上重原町

知立市教育委員会

知立市上重原町小針地内に所在する当遺跡は、猿渡川を臨む碧海台地の縁辺に立地する。昭和49年に知立市教育委員会によりすでに一部が発掘調査されており、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。今回の発掘調査は、土地改良事業に伴うもので、約1,700㎡の調査面積を本年6月から11月にかけて実施した。おもな遺構として、弥生時代中期から古墳時代にかけての住居跡12棟、掘立柱建物跡2棟、中近世の区画溝、土壇墓4基等を検出した。弥生時代中期後葉と古墳時代前期の各住居跡からは比較的まとまった土器が出土し、該期を考える上でも好材料となりうるものである。



調査区西半部検出状況（北より）



中世土壇墓検出状況（南より）

中世の土壇墓のうち、1基は長方形を呈するもので、副葬品として完形の和鏡のほか刀子、土師器、青磁片が出土した。和鏡は青銅製の円鏡で、鈕及び縁を有するが文様の有無は未確認である。さらに、円形を呈する別の1基からは、錫杖の頭部と鉦鼓が出土しており、埋葬形態から座棺と考えられる。これらの事例は、中世の葬送儀礼を考える上でも貴重な資料となろう。

(知立市教育委員会 大野真規)

こまんば
駒場遺跡

豊川市平尾町

豊川市教育委員会

本遺跡は、豊川市平尾町に所在し、北部山地山麓の古期扇状地上のなだらかな斜面に立地する。調査は、県営ほ場整備事業に伴い、5月から11月まで4600㎡の面積で行った。この結果、古墳時代の竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡6棟などが確認された。これらの竪穴住居跡には、炉とカマドが共存しているものもみられた。これらの成果は当地方にカマドの導入された時期を特定する好資料になると思われる。

またこの時期以外には、当初予想していなかった旧石器時



旧石器時代面調査風景（手前は礫群）



古墳時代面風景（A・B地点全景）

代の遺構面が、良好に遺存していることが判明したため、旧石器時代の調査区を設定して調査を行った。出土した遺構・遺物には、礫群、配石や1000点をこえる石器類（フレイク類を含む）、炭化物などが挙げられる。これらのことから、当遺跡はキャンプサイト的な生活の場であり、なおかつ石器制作も行われていたと推定することができる。時期的には、ナイフ型石器文化の時期から細石刃文化の時期までのかなりの年代幅をもっており、長期の人々の生活をうかがうことができる。

(豊川市教育委員会 林 弘之)



愛知県埋蔵文化財センター10周年記念事業

講座

対談『朝日遺跡を考える』

毎回55名前後の参加を得て、講師2名と司会による対談形式によって、朝日遺跡の問題点を浮き彫りにすることができました。



- 第1回(8月19日) 縄文の世界と弥生的世界
- 第2回(9月2日) 食生活を復原する
- 第3回(9月16日) ムラを囲うこと
- 第4回(9月30日) 弥生時代の地域の特色
- 第5回(10月7日) 朝日遺跡のその後
- 第6回(10月21日) 見学(朝日遺跡発掘調査現場)

会場 愛知県埋蔵文化財調査センター

展示

『朝日遺跡への招待』

濃尾平野屈指の大集落の復元に3000名以上の見学者を迎え大好評

期間;10月3日~11月30日
会場;愛知県清洲貝殻山貝塚資料館
共催;愛知県教育委員会・愛知県清洲貝殻山貝塚資料館

逆茂木の復原



朝日遺跡の変遷



発掘体験教室

『親子の考古学教室』

小学校5・6年生の児童とその保護者40組、80名の参加者を得て朝日遺跡の発掘調査を体験していただきました。



発掘調査の他に土器作り・石器作りなどを体験

10月14.15日・12月9日
10月28.29日・12月9日
会場;朝日遺跡発掘調査現場

シンポジウム

『朝日遺跡を科学する』

参加者300名弱

日時;12月3日 9:30~16:00
会場;愛知県婦人文化会館
共催;愛知県教育委員会



シンポジウム プログラム
記念講演

「朝日遺跡と濃尾平野」
井関弘太郎(名古屋大学名誉教授)
基調報告

「朝日遺跡の紹介」石黒立人(愛知埋文セ)

「昆虫および珪藻が語る古環境」
森勇一(愛知県明和高等学校)

「花粉化石による古環境の復元」
吉野道彦(名城大学)

「朝日遺跡の家畜」西本豊弘(国立歴史民俗博物館)

「土器・石器の生産・交流」
永草康次・堀木真美子(愛知埋文セ)

総合討論「朝日遺跡をイメージする」
科学分析が明かす朝日遺跡の風景

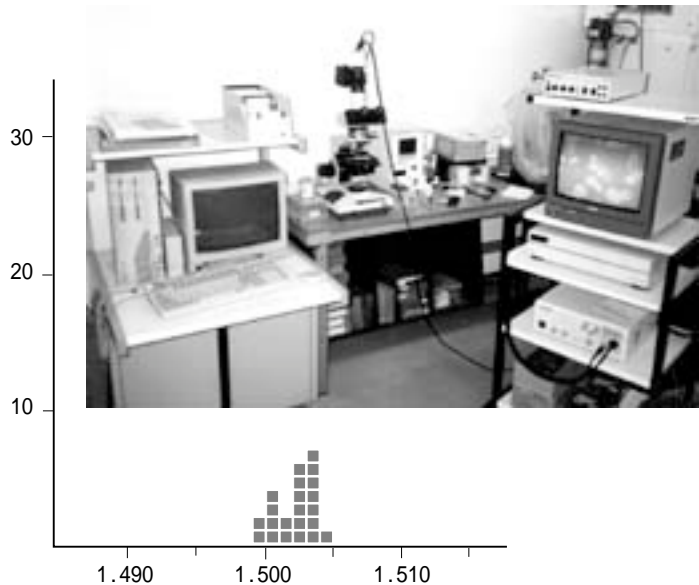


科学分析室だより

屈折率測定装置

愛知県埋蔵文化財センター科学分析室では発掘調査時に検出した火山灰の同定に屈折率測定装置を使用している。この装置は、古澤地質調査事務所製のMAIOTダイレクト測定システム(OIL FREE VERSION)と呼ばれるもので、火山灰中に含まれる火山ガラスなどの屈折率を非常に簡単にしかも正確に測定できるものである。

火山ガラスの屈折率は、火山灰を特徴付ける重要なもので、遺跡で検出される代表的な火山灰である始良Tn火山灰(AT)で $n=1.498-1.501$ 、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)で $n=1.508-1.516$ 、松河戸火山灰(MT)で $n=1.499-1.504$ を示す。もちろん屈折率だけで火山灰を同定することは危険な行為である



火山ガラスの屈折率(松河戸火山灰;一宮市山中遺跡)

が、火山ガラスの形状や重鉍物の組成などと組み合わせることにより、より正確な同定が可能になる。

(服部俊之)

資料紹介

清洲城下町遺跡出土の融着土師器皿

西春日井郡清洲町

愛知県埋蔵文化財センター

清洲城下町遺跡94A区は五条川右岸の清洲公園東端部分であり、清須城本丸東側の内堀とそれにとまなう石垣が検出され、廃城時に投棄された多量の瓦が出土した。内堀は城下町前期の遺構SX02(自然流路の可能性あり)の一部を利用し、不必要な部分を整地して築かれている。SX02からは土師器皿を中心として多くの遺物が出土し、城下町前期(15世紀末~16世紀前半)における五条川右岸の様子を知る上で興味深い。今回紹介するのはこのSX02出土の資料であり、手づくねの土師器皿が2枚融着した遺物である。口径5~6cmで口

縁部の外面にヨコナデを施すことによって体部をつくる形態は清洲城下町遺跡における土師器皿分類の非口ク口1類に所属する。自然釉によって融着した状況はさながら窯跡から出土する焼成失敗品であるが、類例の存在を知らず、何故消費地から出土するのかも疑問である。さまざまな視点からのご教示をいただければ幸いです。



(蟹江吉弘)

編集後記

東海北陸自動車道路関連の発掘調査が大規模に行われております。その調査の過程で多くの貴重な遺構や遺物が発見され、その評価が大変重要な問題となっているものと思われます。各時代における研究課題と方向性が大きく揺れ動く背景にはこうした新たな発見とその蓄積があるものと考えられます。

そしてこうした現代的な研究課題を積極

的に追求する姿勢が大切であり、私たちに課せられた一つの目標でもあります。そしてその成果の最も迅速な公開手段として『埋蔵文化財愛知』があるよう努力したいと思います。(J)

埋蔵文化財愛知 no.43

発行 平成8年1月30日
 編集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
 〒498 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24
 TEL 0567-67-4161 ~ 4163 FAX 0567-67-3054
 印刷 クイックス